

国際交流 その理論と実践

国际交流 理论与实践

李 永寧

志村 和久

Theory and practice of Cultural Exchange between Japan and China

言語表現の真髄は舞台でのセリフにある。“百見は一聞に如ず……”。言葉というものは、変にいじくりまわさない方がよい。“Don't do it so much!”。分析という解剖学的な研究もたしかに必要ではあるが、そうした血だらけな仕事はその筋の外科医にまかせたらよい。言語の庶民としては、そうした生ぐさい肢体 (body) より、美しいリズムを持ったいきいきとした人間から発せられる言葉に魅せられる。

日本語、中国語ともに美しい言語である。日本語は中国語の強い影響を受けて育って来た。日本語の“卡拉OK (カラオケ)”などを受入れた現代の中国語もその色どりをそえる。言語を含む文化というものは、お互いに持ちつ、持たれつ発展して行くものである。

“忠臣蔵”という日本の伝統的思想を濃厚に表現した作品を中国語で、中国語を学ぶ日本人に演じて中国人に伝えてみよう。そうしたことで真の国際交流が叶うのではなかろうか。

言葉というものは、先ず聞くこと、そして話すこと、それが基本的ではないか。始めにオトありき。

キーワード：歌舞伎中国語訳、忠臣蔵漢訳、日本語の中国音漢字

ここでは、とりあえず〈理論と実践〉と題したが、それは起筆の念願であって、結果としては〈実践報告〉に傾斜したものとなった。

国際交流とは、ここでは、日本と中国の親善、相互理解を意味するが、その方途としては、同質乃至近似なるもの、例えば運動スポーツの如きものがある。もうひとつ、異質乃至対比せられるもの、例えば芸能の如きものがある。日本人が中国を訪れば、京劇の魅力に感動する。それに対比

せられるものは、歌舞伎の魅力であろう。この種の古典芸能は、若干の基礎知識を持つことによって、その理解・鑑賞は、より一層深まり、楽しさが倍加する。

中国語学習の教材として、京劇、例えば『孫悟空』の一節を用いることがある。その際、痛感させられるのは、中国語を教えているのか、日本語を教えているのか、ふしぎな思いをさせられることである。日本語に訳すのに、内容が伝わればよいのではなく、適訳に迫るべきであり、「それを言うならば、こう言ってほしい」と歯がゆくなるのである。市販の訳本でも、同様のことが多く見うけられるが、学生であればなおさらである。近年の高校教育の歪みから、日本人が日本語を知らないのである。『孫悟空』のサルたちは、「翻筋斗上」——「上」とは登場の意である。これを、「もんどり打って」と訳して意味は通じる。しかし、適訳としては、「トンボを切って」と言うべきである。しかも、もうひとつ言うならば、トンボのアクセントは、チョウチョ・トンボのトンボとは違うのだそうだ。そこまで知らなくてもよいと言ってしまえば、それで終りである。逆に、中国の側にもあって、諸葛亮が〈借東風〉で唱う、「設壇台、借東風、相助周郎……」の「助」の発音は、日常会話の「帮助」の「助」とは違う。これらの専門知識は、その道の師について指導を受ければ、何でもないことであって、手近かにある中国語辞典では知ることができないけれども、京劇の解説書を見れば簡単に知り得ることである。

中国語教育には、初級・中級・上級と段階がある。少くも指導者は、もう一歩上をめざし、そのような専門の領域があることは十分諒解しておかねばならない。たまたま個々の事例に対応できなくても、全般としてそのようなものであることを承知しておくべきである。

さて、筆者志村は中国語学を専攻するかたわら、日本・中国の古典芸能をも、いわば副専攻とし、日本各地の劇団の歌舞伎公演^(注1)に関与し、その指導・演奏の実際も多年にわたっている。そのうち、調布市公民館の公演では、一日国際交流と銘打って、各国留学生を招待し、英文・ハングル

・中文の解説を用意するばかりでなく、時には舞台上で衣裳の着付けなども指導・実演した。これらの催しに、筆者李は全面的に協力し、共同研究を重ねて来た。

このほど、調布の行事が五年がかりで進めて来た『忠臣蔵』各段の公演を完了し、ひとくぎりついたのを機に、今までの実際を反省し、その在り方の見直しに役立てたいと思う。本稿の主眼は、やや特殊に属する古典芸能の領域で、中国訳による中国人の理解を考究することにある。その意味から、筆者李の研究を重視して、執筆筆頭者とする。

『忠臣蔵』がいかなるものかは、ここでは説かない。日本戯曲の最も著名なものの一つであり、その眼目は、四十七士が団結してひとつの目的に突き進む姿が、素人劇団の運営に暗示するものがあるように思われ、この演目を選んだ。また、『忠臣蔵』は、大序から十一段まであって、むかしは一日がかりで上演した。近年は、二部に分けて公演することも多い。素人劇団が、その名場面を〈つまみ食い〉して、いわば〈ミニ歌舞伎〉と銘打って公演すれば、何回も継続できるのである。その結果、調布では五年間続いた。

筆者志村の、文教大学における中国語指導の一つの願いは、とうとう夢まぼろしと消え去ったが、それは、演劇指導であり、また教科教育法としては、〈劇化学習の理論と実際〉の論述であった。そのことは、別に改めて文字化することとして、〈中日〉の側からは、中国話劇（新劇）の指導、京劇等古典劇の指導を考えていることをふまえ、本稿では、〈日中〉の側からの、しかも日本古典劇の場合を取りあげようとするものである。中国人による中国語訳の「狂言選」は手元にもあり、日本人向け中国語教材に使ったこともある。〈能〉〈歌舞伎〉の中国語訳も、ないことはないが、しかし、歌舞伎の中国語訳は、適当なものが今手元にない。その代りと言っ
てはおかしいが、ここに、次の一書を紹介しておこう。

『日本忠臣庫』

線装本 上中下三冊

宝文閣（名古屋市、梶田勘助）

明治廿三年五月

清 鴻濛陳人重譯

此書清人譯我邦俗院本者近海舶載來不亦珍異乎是以請一先生傍附國訓以命梓公世冀備君子閑燕之覽采云爾

はじめに鴻濛陳人誌として『忠臣庫題辭』がある。乾隆五十九年正月上元と。

次に、鵬齋老人興識として「序」がある。そのあと、第一回、第二回と分かって、第十回に至る。その第十回は、七言の六句があり、続いて「話説……となる。第七回も同様であるが、第二回は、八言二句に七言四句があり、続いて「話説……となる。このように一様ではないけれども、浄瑠璃本の訳としてのくふうが随所に見られる。すなわち、『忠臣庫』と言っても、歌舞伎の台本からの翻訳ではなく、その原作に当る浄瑠璃、つまり今日俗に文楽と呼ばれているものの本である。これを日本では「院本」と書いて「まるほん」と呼ぶ。京劇は音楽劇であって、主役が唱う。それどころかアクロバットもする。しかし、日本の歌舞伎では、主役が唱うことはなく、アクロバットもない。このように、日本・中国の演劇・音曲には似た点もあれば、異なる点も多々ある。

ここに紹介する本は、浄瑠璃の気分を活かすべく、ところどころに韻文を交えている。第二回で、加古川本蔵行国が煙草を吹かしているという場面の原文は、次の通りである。

【原文】女小姓が持出る。煙草輪を吹く雲を吹く。廊下おとなふ衣の香や、本蔵がほんさうの一人娘の小浪御寮、母のとなせ諸共にしとや

かに立出れば……

これを訳して、以下の如くなっている。

【訳文】只見一箇丫頭、拿着芬盤、與本藏喫烟、烟氣濃濃、作雲作輪、
正是

雲殘神女夢 煙駐漢宮姿
遣興無人地 合歡迎客時
仰天成月暈 窺苑作遊絲
知替忘憂物 偏能慰所思

從廊下走將出來、真箇芙蓉窈窕香滿衣、這就是本藏愛女、叫名可那美、
母親名喚托那設、徐徐兒出來……

五言八句の韻文は、原作そのものではなく注目値する。また、人名について見ると、〈本藏〉はそのまゝ〈本藏〉であるが、妻の〈戸無瀬=となせ〉は〈托那設〉(拼音 tuonashe)、娘の〈小浪=こなみ〉は〈可那美〉(拼音 kenamei) とある。

なお、この名古屋版の本には、返り点・送り仮名が施され、左傍には〈真箇〉に〈マコトニ〉と付け、〈徐徐兒〉に〈シトヤカニ〉と付けている。他の小説本などの日本版によく見る体裁である。

次に今回、別に現代語解説を試みた場所の関係で、七段目つまり第七回を開いてみよう。

まず平右衛門が大星に、討入同行を頼み入る条。大星は頭から相手にしない。

【原文】よう思ふて見れば、仕損じたら此方の首がころり。仕負せたらあとで切腹。どちらでも死なねばならぬ。といふは人参呑んで首く

くる様なもの。殊にそこ元は五両に三人扶持の足輕。お腹は立てられな、はっち坊主の報謝米程取って居て、命を捨て敵討しやうとは、そりゃ青海苔貰ふた礼に、太々神楽を打つやうなもの。我等知行千五百石。貴様とくらべると、敵の首を斗升で量る程取っても、釣合はぬ釣合はぬ。所でやめた。ナ聞こへたか。兎角浮世は、かうしたものじゃ。つゝてんつゝてん。なぞと引きかけた所はたまらぬたまらぬ。

是は由良助様のお詞とも覚えませぬ。僅か三人扶持取る拙者めでも、千五百石の御自分様でもつなぎました命は一つ。御恩に高下はござりませぬ。

【訳文】一味哩想東想西、念起貪生之心來、若是做不成、我們頭滾滾地、雖然做得成、也後來破肚死了、東也要死、西也要死、譬似劇病兒服參、癒後無價可還了、自盡一般、況且你是不過領五片金三石口糧的步卒、我似個說、也不要激惱、招化僧齋米一樣的細少吃口糧、也要死命報讐、是似割雞用牛刀一班、孔夫子之所不取、我領錢糧一千五百擔、比你來、是斬讎家的首級車載斗量、也對起不下、纔絕了報讎之念頭、那里如今世上、只是彈的唱的、頑要勾得好了、平右衛門道、這不像由良爺的話、僅領三石的晚生、和領一千五百擔的尊丈對起、也是所係屬性命全同、怎生論恩惠厚薄、

「雞を割くに牛刀を用ひんや」の話を出し、孔夫子の取らざる所と言っている。

次に、飛んで最も有名なお軽の出となるところを見よう。九太夫が鶴抜けの計略で、駕かきと伴内が引込んだあとである。浄瑠璃の床（ゆか）は掛合で、最も美声の太夫が、お軽の部分語る。浄瑠璃では〈唱う〉と言わず〈語る〉と言うが、素人耳には〈唱う〉と考えてかまわない。その原文は、

【原文】折に二階へ、勘平が妻のおかるは酔さまし。はや里馴れて吹く風に、憂さをはらして居る所へ

〈由良助〉……

【訳文】只見勘平渾家活佳兒、搭伏凭樓上欄干邊、看景思郷、感傷懷抱、有詩爲證

辭輦畫成新様眉 陌頭春樹上林枝

寵來長信宮中語 綻入翠樓花月詞

由良助……

ここに詩を置いたのはみごとである。〈渾家〉は妻であり、〈活佳免〉は〈おかる〉に当る。そのあと、〈三下り歌〉があって、歌舞伎で言えば下座音楽の受け持ちである。その歌詞は、

【歌】父よ母よと泣く声聞けば、妻に鸚鵡の、うつせし言の葉。エ、なんじゃいなおかしゃんせ

【訳】呼爺呼娘和鳴頻

疑是夫妻共結親

誰料写来鸚鵡語

頓教娼婦淚沾巾

そのあと、おかるの延べ鏡の件りとなる。由良助が、あたりをはばかりながら、子息力弥（りきや）の届けて来た御台様の長文を読む。これを、向う屋台の二階で酔さましのおかるが、手鏡を取り出し、これに御台様の手紙をうつして読み取るのである。そんなことができるはずもなく、原文にも

【原文】夜目遠目なり、字性もおぼろ、

と言っている。しかし、日本の観客は、二階と下の座敷、そして、さらには縁の下に九太夫が居るといふ構図を絵として見て、その絵そらごとを觀賞しているのである。かの、誇張はご本家のはずの清人も、さすがにこの条では黙っていられた。この本には、ところどころ上欄外に注記があるが、この条の注記は次の通りである。

【注】鏡子與千里鏡異矣、何有使遠物明見之理哉。是作者弄筆以欺痴人處

この訳本は、まことに珍書であり、日本人学生の教材としてもおもしろい。そのことは、また稿を改めるとして、今、この訳文の紹介はこのくらいにとどめるとしよう。

筆者志村は、かねて中国語教育ならびに中国人との会話において、日本の人名・地名等を中国音で言うことに反対してきた。その論はここで力説するいとまがない。いちおう、日本の人名・地名等を日本の読み方で中国人に伝えるものとして論を進めたい。

では、それをどのように表記するか、国際音声符号を用いるもよし、日本で通常に用いられる（例えば文部省式とか、ヘボン式とかと呼ばれる）ローマ字表記を用いるもよからう。そこでひとつの選択を考えねばならないとして、その論も棚に上げ、ここでは、日本の読み方を漢字表記することを考えてみたい。以下、発音を示すものを〔 〕内に入れるとして、〔ア〕は阿、〔イ〕は伊と記すれば、これは、日本の仮名文字の起源でもあり、すべてがこの伝でゆけば、まことにめでたいことである。しかるに、実情は、そうはゆかない。方言などをさぐれば、相当するものがあるであろうが、ごく日常的なわかりやすい中国普通話と日本の音訓を対称させれば、しばしば該当するものがないことがある。例えば〔キ〕〔ケ〕の類は、

該当する中国語（漢字）がない。中国人に対する日本語教育では、もっと直接に、日本の発音を示し、補助手段として（記号として）は、日本式のローマ字を用いたほうが、将来何かと便利である。けれども、今考えているのは、それと少し異なる。次に一案を示す。表のうち（ ）を付したものは検討の余地があり、（ ）内が空白のものは、博雅の教示を待つものとする。いちおう漢字を当てたものでも、適否の論はあるべきで、ここには手がかりを作ったにすぎない。なるべく四声の一声を優先させるが、語によって二・三・四声の文字を用意しておくか、さまざまなことが考慮せられるであろう。

あ	阿	い	伊	う	烏	え	耶	お	喔
か	咖	き	(規)	く	咕	け	()	こ	个
さ	拏	し	西	す	斯	せ	()	そ	缩
た	搭	ち	期	つ	刺	て	(爹)	と	多
な	那	に	尼	ぬ	奴	ね	(内)	の	(诺)
は	哈	ひ	(飞)	ふ	夫	へ	()	ほ	(喝)
ま	麻	み	咪	む	模	め	(没)	も	摸
や	丫			ゆ	(由)			よ	哟
ら	拉	り	立	る	路	れ	(列)	ろ	咯
わ	蛙	濁音等省略							

このように、いちおうの手がかりを作ったとして、例えば、日本人の中国語初級教育にあって、最近では、あまりにも拼音にたよりすぎる。教材が、漢字に総ルビのごとく拼音をならべて表示されている。そこでいろいろの弊害を生じるが、そのひとつとして、いわゆるギナタヨミになることである(註2)。文章や会話は流れに従って発音せられるべきで、せめて単語、単語のくぎりが分かって発音してほしい。例えば、「这程子真爱下雨……」というときに、「这程・子真・爱下・雨……」と読まれていけない。初学

者は、ただ拼音をたどって発音することに懸命で、語の区切りを無視する。従って、教員の用意する教材は漢字も拼音も、分ち書きに留意すべきである。以上のことは、今考えている中国人向けの日本語教育についても言えることであって、例えば、[エンヤ(盐谷)]という人名は、[エ][ン][ヤ]という三語ではない。それならば、漢字表記も、機械的に表から三字を拾ってくるのではなく、[恩丫]と示したほうが近似値が得られようというものである。以下、日本の地名・人名等には下線を付し、そのあとに[]を用いて漢字の中国音による発音を添えることとしよう。

[例] 塩谷(えんや) → [恩丫] 拼音 enya

高(こうの) → [沟诺] 拼音 gounuo

大星(おおほし) → [区波西] 拼音 ouboxi

さきほど紹介した清人重訳『忠臣庫』では

となせ → 托那設 tuo nashe

こなみ → 可那美 ke nami

のごとき音訳があった。近似音が得られているように思う。しかし、

おかる → 活佳兒 huojiar

の場合は、〈新加坡〉の加に類するものであろうか。外国人名・地名の漢訳を参照すべきか、しかしながら北京普通話をとるとすればいかに考えるべきであろうか。

〈加〉は北京で [jia] であるが、広州では [ga] である。〈佳〉は北京で [jia] であるが、広州では [ga] である。

本稿は、日中国際交流のひとつの在り方を論じるものであるが、はじめに記した調布における実践の一斑を以下に示そう。

忠臣蔵 [㊦出心咕拉]

全十一段之内 第六・七段

過去、在日本の封建社会里、经常发生这样的事：主子冤枉致死，他手下的武士替他报仇雪恨。『忠臣蔵』[㊦出心咕拉]就是以这种报仇为主题的

代表作之一。

以前，日本的武士犯了错误，用“剖腹自杀”的形式来负起其责，叫做“[㊦哈拉规立]”。

『忠臣藏』里的一段，有个叫勘平 [㊦看北] 的英俊青年要剖腹自杀。他是个招人喜欢的漂亮小伙子，姑娘们看了就一见钟情。所以，当演员的，无不希望扮演这个角色。

大约三百年前，掌握日本全国政权的，不是天皇，而是德川 [㊦多咕咖蛙] 大将军。有时候，天皇派了一位使节到这位大将军的住处进行礼节性拜访。有位叫塩谷 [㊦恩丫] 的诸侯负责接待这位使节。在执行接待任务的过程中，塩谷受上级诸侯高 [㊦沟诺] 的百般刁难，在忍无可忍的情况下，塩谷拔刀行凶，伤了高。结果塩谷被迫剖腹自杀。

主子危急存亡之际，有位武士，叫勘平的，不在主子身边。当时，他正和一个叫阿轻 [㊦喔咖路] 的情妇幽会呢！他感到很惭愧，要以剖腹自杀表达他自己的悔恨心情。但被阿轻拦住。死不了，活不得，里外不好做人。勘平只得先躲到阿轻她父亲家，决心等待时机为主子昭雪。

经过一个途径，勘平得知他的伙伴们正要为他们的主子报仇。勘平当然也要投入这个计划。执行这个计划需要一大笔资金。有一天，勘平手持猎枪，在深山老林打野猪。误伤了一个赶路人，并发现他怀中有重金。勘平想到行动计划的资金问题，就昧着良心，拿了这笔钱，投奔朋友，哀求加入组织，替主子报仇。这位过路人，伤势严重，终归死掉。村里的人抬回尸首。这时勘平才发现他就是阿轻的父亲。这些钱是阿轻卖身妓院得来。阿轻的母亲责备勘平，赶到现场的两个朋友也恨恨地责备他。他只是哀叹，哭泣。在七嘴八舌的谴责声中，勘平剖腹自尽。

事后才弄明白，阿轻的父亲是被人谋害致死，而勘平用枪打死的人是杀害阿轻父亲的凶手，真相大白，朋友们追认勘平，把他的名字郑重地列入报仇名单里。由于重重误会，勘平是死去了。但对他来说，是“死得其所。”这出戏所要描写的，不是悲剧，而要描写为达到报仇雪恨这个远大目的甘愿

去死的人。

话要说回来，阿輕不知道勘平的死，在妓院当艺妓。大星〔㊦区波西〕是组织雪恨计划的首领。为了整个计划的顺利执行，他假装整天泡在妓院喝酒“取乐”。有一天，大星在妓院看联络信件，一不小心，给阿輕看见了，为了保密，他想把阿輕带出去杀人灭口。正在这时，阿輕的亲哥哥平右衛門〔音黑耶孟〕进来了。领会大石的意图，为了计划的顺利执行，平右衛門决心亲手杀掉自己的妹妹。平右衛門对主子的这种耿耿忠心，打动了大星。他取消了杀害阿輕的念头，并让平右衛門加入报仇队伍的成员之一。

戏剧情节就介绍到这里。为了演出成功，请大家喝彩鼓励！ 谢谢

忠臣藏 第八段

本藏〔㊦轰走〕的闺秀小浪〔㊦可那弥〕和大星〔㊦区波西〕的公子力弥〔㊦立规丫〕是对未婚夫妻。由于大星的主子不幸遭遇，这门亲事也受到连累。

小浪姑娘在她母亲的陪同下，决心到大星家拜访落实自己的终生大事。若事不成，她打算再也不想在人世了。

路上，她遇见江湖艺人，又有时见到其他诸侯家公主的堂堂行旅队伍，好不热闹。还有时，路过偏僻的地方，忽然一对蝴蝶精出现在她眼前。

小浪姑娘动身时正是秋冬季节，草木枯寂的时候，对她的未来说是存亡未卜的旅程，心情当然不会轻松。可是，调布市民歌舞伎对这些情况加于必要的艺术处理，超越自然界的四季变迁，路程两傍还是各画家的古典作品一样艳丽夺目，注意突出鲜明悦目的人物表演和热闹悦耳的音乐。

舞台に公演したものは、大序から十一段目までの各名場面を〈ミニ歌舞伎〉としたのである。ここに掲出した、六段目・七段目は、一部分縮約し

たが、ほぼ現行の大歌舞伎にのつとった。また、八段目は、舞踊劇であり、役者は戸無瀬と小浪の二人である。これでは役者があまってしまうので、筆者志村が改作した。つまり東海道を山科（やましな）に向かって旅する母娘が、さまざまな人や物にであうという設定である。とりわけ『蝶の道行』を加えた。

このようなくふうは大詰の討入りでも、吉良邸と隣家土屋邸(注3)の両面が躍動的に展開されるようにした。従って、それなりの外国人向けの説明が必要となった。

最後に蛇足を添えたい。本稿は、標題に示す通り、国際交流のあり方を探究する一つの手がかりを論じるものであった。それは、中国人に日本の古典芸能を紹介する場合について考えようとするものであった。しかし、欲をかくようであるが、日本人学生への中国語教育の面についても考えたい。まず、一般論として、ただに中国語学習者のみならず、学生全体が、古典芸能どころか古典そのものが無視と言わぬまでも無理解なことである。ひいては、日本の文化・文学への関心の薄さである。中国のこと、中国語のことは、まがりなりにも若干の知識を得ながら、日本のことは、からきし分からない。これでよいはずがない。中文科の指導について、この点を考え直したいと思う。中国語教員志望者が巣立って行くが、中国語免許だけでなく、ぜひとも国語免許をも持ってほしい。中国語がわかっても日本のことがわからないのでは困る。いや、日本語がわからない者に、正しい中国語指導ができるとは思われない。

(注1) 東京浅草、劇団むらさき座。神奈川藤野町歌舞伎保存会。調布市公民館市民歌舞伎等。

(注2) 「ギナタ読み」とは、「弁慶が雑刀をもちて……」と読むべきものを、「ベンケイガナ・ギナタヲ……」と読むもの。「広辞苑」所載。

(注3) 通常、『仮名手本忠臣蔵』の大詰としては、土屋邸は出ない。『土屋主税』か『松浦の太鼓』として独立して上演される。その土屋邸の場を、討入大詰とないまぜにし、暗転で舞台転換をはかった。